

学術論文

# 問いの基礎理論序説

佐藤 裕

富山大学人文科学研究第77号抜刷

2022年8月

# 問いの基礎理論序説

佐藤 裕

## はじめに

何かを考える際に「問い」が非常に重要であることは言うまでもないだろう。問いを立てることなしに考えることはできないし、的確な問いを立てるのはしばしば困難なことだからだ。

また、「問い」は私たちのコミュニケーションにとっても重要な役割を果たしている。質問をしてそれに答えることはごく基本的コミュニケーションだが、それ以外にも、私たちはしばしば、何が問われているのかを意識しながら話すことや書くことを考える。つまり、「暗黙の問い」を意識することも円滑なコミュニケーションのためには必要なのだ。

このように、問いは私たちにとって考える必要のある重要なテーマであるはずだが、これまで問いについての根本的な考察はそれほど行われて来なかった。それはおそらく、私たちにとって何らかの問いに「答える」ことは、その方法も含めて意識されやすく考察の対象にしやすいことであるのに対して、「問う」ことそれ自体についての考察は独特の困難を伴うからだと思われる。

しかし、近年になって分析哲学の流れの中から問いについての本格的な考察が行われるようになってきた。日本においても入江幸男氏が問いについての哲学的研究を発表しており、2020年にはそれらをまとめた書籍『問答の言語哲学』（入江 2020）を出版した。これは問いをテーマにした本格的な哲学書としては日本で初めてのものだろう。

本稿は、このような研究を足掛かりにして、(哲学的ではなく) 社会学的な「問いの基礎理論」の構築を目指そうとする。社会学的といってもその立場は様々なのでもう少し限定すると、問いを「方法」として理解する、つまり「問いという方法」や「問いの方法」を明らかにしようという立場である<sup>1)</sup>。

「問いという方法」について考えようとするならば、まずそれが何のための方法であるのかを明確にしておくことが必要だろう。本稿では、問いを「思考の方法としての問い」と「コミュニケーションの方法としての問い」という2つの領域で考えていくこととする。

前者については、冒頭でも書いたように問いを立てる方法に焦点を当ててゆきたいが、そのためにはまず問いというものが思考の中でどのような役割を担っているのかを明らかにする必要があるだろう。

後者については、私は暗黙の問いに特に注目しているのであるが、それについて考えるため

にはまず（暗黙ではない）問いがコミュニケーションの中でどのように位置づけられるのかを明らかにする必要がある。

以上のような問題関心にに基づき、これから入江の著作を足掛かりにして、問いについての考察を進めていくのだが、まず出発点として「問いとは何か」という問いを設定したい。

同書は、この問いに対して直接的には答えていないが、私の解釈では答えになりうる主張が3つほどあると思う。

1つめは、「問いは推論の<前提>である」という主張<sup>2)</sup>だ（入江 2020: 第1章）。前提という言葉を<>で括っている理由は、「論理学で通常用いる『前提』とは意味が異なる」（入江 2020: 4）ということなので、とりあえずは「前提のようなもの」と受け止めていただきたい。この主張は、推論（思考）において問いがはたす役割について考察するための足掛かりになる（本稿第1節）。

2つめは、「問いは発話の焦点を決定する」という主張だ（入江 2020: 第2章）。焦点とは言語学の言葉であるが、入江は「『他でもなくこれ』という仕方です」「最後に選択される部分」<sup>3)</sup>（入江 2020: 105）と説明している。例えば「リンゴが赤い」という文の場合、「（モモやオレンジなどではなく）リンゴが赤い」という主張であれば「リンゴ」が焦点、「リンゴが（青や黄色ではなく）赤い」という主張であれば、「赤い」が焦点である。このような焦点は、その文を答えとする質問（相関質問）によって決定される。先の例であれば、「リンゴは何色か」と問えば（「リンゴは何色か」が相関質問であれば）「赤色」が焦点になるし、「どれが赤いか（赤いものはどれか）」と問えば「リンゴ」が焦点になるというわけだ。この主張は、問いがどのように作られているのかを考える足掛かりになり、問いの立て方の考察にもつながる（本稿第2節）。

3つめは、「問い（質問）は言語行為の1つである」という主張だ（入江 2020: 第3章）。入江は明示的にそのような主張をしているわけではないが、サールらの言語行為論の枠組みの中に質問を位置づけようとしている。

しかしそのような入江の試みは、結果的に言語行為論を支える理論枠組みの問題点を明確にすることになったと筆者は見ている。そのため、発話を分析の単位とする言語行為論ではなく、初めから質問と応答の組み合わせを1つの単位とした理論枠組みが必要であることを明らかにしたい（本稿第3節）。

質問と応答の組み合わせを単位とした分析枠組み<sup>4)</sup>は、非常に強力なものだと私は考えているが、1つ大きな問題を抱えている。それは、問いが実際には存在しないのに答えの部分に相当する発話だけが行われる、という事態が非常に多く存在するということだ。例えば自己紹介は、「あなたは誰か」という問いに対する答えだと考えられるが、実際にはそのように問われ

てから自己紹介をすることはあまりない。このように、問いが発話されていないのに答えに相当する発話だけが行われることを、私は「問いの先取り」と呼んでいる。質問と応答の組み合わせを単位とした分析を行うために、問いの先取りがなぜ、どのように行われるのか、聞き手は先取りされた問いをどのように察知しているのか、といったことを明らかにしたい（本稿第4節）

以上が入江の主張から導かれた本稿の主要な論点であるが、実はここまで書いたこと（これから書くことも一部含まれる）は、第2節で説明する予定の「問いの立て方」の1つの実例となっている。本稿は問いという抽象的な対象についての考察ということなので、問いを立てることの難しさは相当なものだ。そこで、かなり変則的なやり方ではあるが、本稿自体を問いの立て方の応用例として解説する、という試みを最後に行いたいと思う（本稿第5節）。

なお、本稿では、『問答の言語哲学』（入江 2020）からの引用が非常に多くなるため、同書からの引用に限ってページ数のみを表記することにする。

## 1. 問いは推論の前提なのか

### 1) 推論の<前提>

入江は、演繹的推論<sup>5)</sup>の同じ前提の組み合わせから得られる結論は複数考えることができるにもかかわらず、特定の命題が結論として選ばれるのはなぜかという問題提起をしている(p.3)。例えば以下の前提の組み合わせについて考えてみよう。

すべてのペンギンは鳥である。

すべての鳥は卵生である。

この2つの前提から導かれる結論は、以下のようにいくつも考えることができる。

あるペンギンは、卵生である。

卵生でないペンギンはいない。

すべてのペンギンは卵生である。

上の3つの命題は、すべて2つの前提が真である場合に真になる。にもかかわらず、多くの場合は最後の「すべてのペンギンは卵生である」が結論として採用される。これは、暗黙のうちに「ペンギンは卵生か」という問いが<前提>としてあるからだ。もし<前提>となる問いが「卵生でないペンギンはいるか」であったなら、同じ前提の組み合わせから、「卵生でないペンギンはいない」という結論が採用されるはずだ。

このように入江は、問いが存在することによって初めて（妥当な）結論が選択されることを指摘し、このことをもって問いが推論の<前提>であると主張するのだ。

しかし、「はじめに」でも説明したように、問いは論理学で通常用いる意味での「前提」ではない。問いの存在は結論の正しさ（真偽値）に影響を与えないからだ。では、なぜ入江は<

>を付けたとはいえ、「前提」という表現を使ったのだろうか。

## 2) 推論の妥当性

この点について、入江は明確な説明をしていない。そこで、入江の主張も参考にしつつ本稿独自の考察を進めたいと思う。混乱を避けるため、論理学で通常用いる意味での「前提」を、単に「前提」と表記し、入江が<前提>と表記した問いは、「問い」と表記することにする。

先に書いたように、問いは推論の真理性には関与していない。どのような問いが立てられたのかとは独立に、前提と結論の関係だけで真理性は判断されるのだから。しかし、問いは推論には関与している。結論が問いへの答えになっているかどうかは、推論の妥当性の条件だからだ<sup>6)</sup>。結論が正しいかどうか（真理性）と、妥当かどうか（妥当性）の違いは重要な点なので、先ほどの例で確認しておこう。

「ペンギンは卵生か」という問いに対して、先に示した2つの前提を置き、「すべてのペンギンは卵生である」という結論を出す推論は、正しいし、妥当でもある。一方、同じ問いと前提に対して「卵生でないペンギンはいない」という結論を出す推論は、正しい（結論が真である）が、妥当ではない（問いの答えになっていない）。これが真理性と妥当性の違いだ。

しかし、「卵生でないペンギンはいない」という結論は本当に「妥当ではない」と言い切れるのだろうか。以下の推論について考えてみてほしい。

ヒトは胎生か

すべてのヒトは哺乳類である。

すべての哺乳類は胎生である、とは言えない<sup>7)</sup>

すべてのヒトは胎生である、かどうかは分からない

この場合の結論は「正しい」が、妥当性についてはどうだろうか。直感的にはあまり妥当ではないと思われるかもしれないが、この前提から導かれる結論の中では最も妥当なものであるはずだ（例えば「哺乳類でないヒトはいない」といった「正しい」結論よりは、問いに対する答えという形になっているので妥当だろう）。

しかし、「すべてのヒトは胎生である、かどうかは分からない」という結論がこの問いに対する最も妥当な結論であり、それ以上に妥当な結論は存在しないということではもちろんない。例えば上の推論の「哺乳類」を「霊長類」に入れ替えてみよう。すると、2つ目の前提は「すべての霊長類は胎生である」と変化し、結論は「すべてのヒトは胎生である」となる。もちろんこの結論の方が、先のものよりもより妥当であろう（確定的な答えであるから）。

以上の考察から、まず推論の（結論の）妥当性は、妥当である／妥当でないという絶対的な基準ではなく、この中では最も妥当だ、とか、こちらよりこちらの方がより妥当だ、といった相対的な基準であることがわかる（これに対して「真理性」は絶対的な基準である）。

### 3) 前提の妥当性

問いと妥当性についての考察をさらに進めてみよう。

上で見たように、結論の妥当性は前提の立て方によって変わる。ということは、前提もまた、妥当性という基準で評価可能だし、(より良い推論のためには) 評価しなくてはならないということになるはずだ。先ほどの例で言えば、「すべてのヒトは哺乳類である」という前提よりも、「すべてのヒトは霊長類である」という前提の方がより妥当だということになるだろう。

前提の立て方によって、推論の妥当性が変わるということは、より良い推論のためには、より妥当な前提を選ばなくてはならない。ということは、ここには「問い」があるということになるが、その問いとはどのようなものだろうか。2つの前提の中で異なる部分は「哺乳類」と「霊長類」なのでそこが問われている、すなわち、「ヒトとは何か」といった問いが暗黙のうちに存在しているのだと考えるべきだろう<sup>8)</sup>。

このように考えると、先に示した推論は、暗黙に問われている問いを補うと以下のように表現できる<sup>9)</sup>。

Q1: ヒトは胎生か

Q2: ヒトとは何か。

A2: すべてのヒトは哺乳類である。(前提1)

Q3: すべての哺乳類は胎生か。

A3: すべての哺乳類は胎生である、とは言えない(前提2)

A1: すべてのヒトは胎生である、かどうかは分からない。(結論)

この中から、Q2とA2を取り上げてみよう。A2はQ2に対する答えであるが、その妥当性はQ2を基準に判断できるのだろうか。

もちろん、Q2も判断基準の1つではあるはずだ。A2は「ヒトとは何か」という問いに対する答えとしてふさわしいものでなくてはならないからだ。しかし、それだけが判断基準ではない。「哺乳類である」という答えは最終的に(Q1を基準として) 相対的に低い妥当性しか持たない結論(A1)に結びつくからだ。つまり、Q1もまたA2の妥当性を判断する基準となっているのだ。以上のことから、A2という答え/前提の妥当性は、直接の問いであるQ2だけでなく、上位<sup>10)</sup>の問いであるQ1にも依存していること分かる。

それでは、A2の妥当性はQ1とQ2だけで判断できるのだろうか。確かに最終的な答えであるA1の妥当性を判断できるのはQ1があるからだが、そもそもA1のように十分に妥当ではない答えが導かれたのは、Q3に対してA3のような答えが出たからだ。つまり、A2の妥当性は下流<sup>11)</sup>の問いであるQ3(の答え)にも依存しているということになる<sup>12)</sup>。

#### 4) 問いの妥当性

ここまでは、前提の妥当性を検討してきたのだが、前提が問いへの答えだとすれば、その問いについてもまた、妥当性を評価する必要が出てくる。なぜなら、適切な（下位の）問いを立てなければ妥当な推論は可能にならないからだ。例えば、以下のように問いを立てるとしよう。

Q1：ヒトは胎生か

Q2：ペンギンとは何か。

もちろんこのような問いの立て方は妥当ではない。では、次の問い（Q2）はどうだろうか。

Q1：ヒトは胎生か

Q2：胎生であるのはどのような生き物か。

Q1を基準に考えるなら、この時点ではQ2も十分に妥当だと言えるだろう。Q2を「ヒトとは何か」とした場合と比べても簡単に優劣はつけられない。しかし、下流の問いへの答え如何によっては、Q2はあまり妥当ではないと判断されるかもしれない。

このように、問いに答えるために立てられた（下位の）問いもまた、上位の問いによってその妥当性が判断されるのだ。

#### 5) 問いによる「方向づけ」

ここまでの議論をまとめてみよう。

まず、問いに答えるために立てられた（下位の）問いも、その問いに対する答えも、そして最終的な答えも、すべてもとの問いによってその妥当性が判断される。また、その妥当性とは妥当／妥当でないという二者択一ではなく、互いに比較されるような相対的な基準である。

ではなぜ妥当性は相対的な基準なのだろうか。それは、私たちが問いを基準にして、（下位の）問いや、それに対する答えや、最終的な答えを「選ぶとする」からだ。どちらも妥当だとかどちらも妥当ではない、ということであれば、どんな問いを立てれば良いのか、どの答えを選べば良いのかを判断できない。だから妥当性という基準は相対的でなくてはならないのだ。

私たちは問いを基準として、（下位の）問いを選び、それに対する答えを選び、そして最終的な答えを選んで、最も妥当性の高い推論を行おうとする。問いはそこにある（下位の問いも含めた）全てのプロセスに「選択の基準を与える」という形で関与する。

このことをもって、私は「問いが推論を方向づける」<sup>13)</sup>と主張したいと思う。

#### 6) 2種類の推論

問いから始まり、さらにそれぞれの前提も何らかの問いへの答えだとする推論イメージは、これまで考えられてきた、前提と結論だけからなる推論のイメージとは大きな隔りがある。本稿が前者の推論イメージを提案するということは、従来の推論イメージを否定するというこ

となのか。

そうではなく、それぞれは異なるタイプの推論のイメージなのではないだろうか。入江も「問いの答えを見つけるプロセスには、次の二通りがある」(p.5)と述べており、その2つが先にあげた2種類の推論イメージに合致する。入江によると前者は「ある問いに対する答えを見つけようとして、すでに知っている知識を前提として、そこから推論によって答えを求めようとする場合」、後者は「問いに対するある暫定的な答えないし答えの予想をえて、それを証明するために、それを結論とする推論を考える場合」ということになる (p.5)。

このような主張に対する筆者の見解は、前者についてはおおむね妥当だが、後者についてはもう少し表現を変える必要がある、というものだ。入江の表現では「考える場合」というやや漠然とした言葉で終わっているので、そこはもう少しはっきりと、「暫定的な答えの正しさを確認するための推論」とするべきではないだろうか。

入江はこの2種類の推論の相違について、それほど重視はしていないようだが、筆者はこの違いは非常に大きな論点ではないかと考えている。そこで、これらを「問題解決推論」「回答確認推論」と命名したいと思う。

回答確認推論は推論(結論)の正しさを確認する推論であり、その判断基準は真理性である。真理性を判断するためには問いは不要であり、そのために答えの部分(前提)だけからなる推論の記述形式(伝統的な三段論法などの記述形式)が採用される。この推論においては、問いを選択したり問いの答えを選択したりすることはなく、ただ与えられた答え(前提)の組み合わせから結論の真偽値を判断する。

一方問題解決推論は、問いに対してより妥当な答えを探し求める推論だ<sup>14)</sup>。すでに見たように妥当性とは相対的な基準であり、だからこそ、より妥当な問いと、下位の問いへのより妥当な答えを選ぶことができる。私たちは問いに方向づけられることによって、より良い答えを探し求めるのだ。

真理性は非常に明快で単純な基準であるため、回答確認推論は記号によって抽象化しやすい。実際に記号論理学として体系化されていることからそのことは確認できる。しかし、妥当性は問いに依存し、問いの種類によって非常に多様であり、またしばしば複雑なものとなる<sup>15)</sup>。そのため、記号によって抽象化した記述は困難だと思う。

回答確認推論も問題解決推論も本稿の目的の1つである「思考」であることに違いないが、まず問題解決推論によって暫定的なものであれ答えが提出されなければ、回答確認推論が意味をなさないことと、回答確認推論についてはすでに多くの考察がなされていることなどを踏まえて、本稿ではこれ以降、主として問題解決推論を扱うことにする。

問題解決のためには(問題解決推論を行うためには)、計算力や記憶力だけでなく(もちろん



んそれらも必要だが)、問いや答えの妥当性を評価する能力が必要だ。論理的に正しい答えがいくつもあるときに(例えばヒトが哺乳類であるという答えも正しいし霊長類であるという答えも正しい)、どの答えが最も妥当なのかを判断できなくてはならない。また、その前提として、正しい答えを複数見出すことができなくてはならない。ただ1つの正しい答えを見つけることができればそれで満足してしまうというのではなく、ほかにもまだ正しい答えがあるかもしれないと探し求めることが必要な(場合がある)のだ。

記憶や計算によって正しい答えを見つける訓練だけを続けても、人間はコンピュータに太刀打ちできない。正しい答えを複数見つけ出し、広い視野から最も妥当な答えを選ぶトレーニングこそ、現代を生きる私たちに必要なのではないだろうか。

## 2. 発話の焦点と問いの関係

### 1) 問いと焦点

問いについて考える際に、問いと焦点との関係を明らかにすることは極めて重要である。その足掛かりになる入江の基本的なアイデアを確認してみよう。

本稿が取り上げる入江のアイデアは、相関質問によって発話の焦点位置が決まる、というものだ(p.107)。入江が提示する例は少しわかりにくいと思うので、別の例を使って説明したい。

Q1 あなたは昨日どこに行きましたか。

A1 私は昨日東京に行きました。

Q2 あなたはいつ東京に行きましたか。

A2 私は昨日東京に行きました。

A1とA2はまったく同じ文であるが、焦点位置が異なる<sup>16)</sup>。それは、それぞれの相関質問(Q1とQ2)が異なるからだ。これが「相関質問によって発話の焦点が決まる」という主張の意味するところだ<sup>17)</sup>。

この主張それ自体は、特段驚くような内容のものではない。「焦点」とか「相関質問」といった難しい言葉を使わなければ、私たちがすでに知っている事実なのではないかと思う。ただ、この事実から導かれる主張はかなり重大な意味を持つ。入江は「(多くの場合)発話の意味は相関質問との関係において明確になる」(p.107)と述べているのだ。

上の入江の主張は、逆から言い換えれば、発話の意味は相関質問との関係がわからなければ(十分には)明確ではない、という主張と(ほぼ)等しいだろう。例えば、上の例の「私は昨日東京に行きました」という文の意味は、それがどのような質問への答えなのかがわからなければその意味を確定できない、ということだ。これをさらに一般化すれば、「平叙文の意味は相関質問によって初めて確定する(ことがある)」ということになるだろう<sup>18)</sup>。

これはかなり強い主張なので、もう一度焦点に戻って考えてみよう。

相関質問によって変わるのは焦点の位置だ。そしてそのことによって発話（平叙文）の意味が変わるといふのなら、焦点の位置が異なる発話は意味が異なる、ということを示さなくてはならない。このことを確認するために、上のA1とA2を分裂文に書き改めて見よう（Q1とQ2も同様の形式に書き改めた）。

Q'1あなたが昨日行った先は、どこですか

A'1私が昨日行った先は、東京です

Q'2あなたが東京に行ったのは、いつですか

A'2私が東京に行ったのは、昨日です。

このように書き改めて見ると、A'1とA'2では話し手が相手に伝えようとするものが異なるのは明らかだろう。少なくとも発話行為として見る限り、相関質問によってその意味は変化するのだ。分裂文への変換は問いと答えの関係をよりクリアに示すので、上の例文についての考察をもう少し進めてみよう。

Q'1とA'1、Q'2とA'2をそれぞれ比べると、前半部分は「あなた」が「私」に変わっただけで事実上全く同一の内容だ。この部分は問いの「条件」であり、A'1とA'2にそれが現れるのは、その条件をいわば復唱しているのだと考えられる。ということは、純粹に答えと言えるのは焦点に該当する部分だけではないだろうか。

焦点こそが答えだという考え方はそれほど突飛なものではないと思われる。例えばA'1とA'2はそれぞれ「東京です」「昨日です」という返答であっても問題なく意味が通じるし、日常会話ではむしろその方が自然ではないだろうか。逆に言えば、平叙文とは本来の答えである焦点に問いの条件を加えたもの、つまり「平叙文＝問いの条件＋答え」である。平叙文発話は常に何らかの問いに対する答えなのだ。

それではここまでの議論をまとめて今後の展開を示しておこう。

まず筆者が提示する結論の1つめは、平叙文が問いの条件と答えの合成である、ということだ。これは入江の言う「平叙文中心主義の誤謬」(p.iii)の有力な根拠になる。ただ、この論点に関しては他にも議論したいことがあるので、第4節で改めて取り上げることにしたい。

2つめは、焦点こそが「答え」であるという結論だ。このことを強調するのは（上の平叙文中心主義とも関連するが）、平叙文としての返答文を「答え」であると考えてしまう傾向が、これまでの議論に見られるからだ。そこで、次のセクションからは返答文ではなく焦点を「答え」とみなすことによって、問いについての考察が一気に進むことを示したい。なお、焦点としての答えと返答文としての答えの混同を防ぐため、これ以降は前者であることを強調したい場合に<答え>と表記し、後者は「返答文」と表記することにする。

## 2) 答えの選択としての問い

返答文の焦点が(本来の)答えである、ということを先に述べたが、それでは質問文の焦点にあたる部分はどのようなものだと考えればよいのだろうか。上の例では、「東京です」「昨日です」が〈答え〉であるのだが、それに対応する「どこですか」「いつですか」はどのようなものなのかを考えようということだ。

「どこ」という言葉には、少なくとも何らかの場所が該当することは確かだが、それが具体的にどこなのかはまだ確定しない、という意味だと考えられる。「いつ」も同様で、時間(日付や時刻)ではあるが具体的には確定していない。ということは、問いとは考えられる〈答え〉の集合を提示してそこから妥当なものを選ぶ<sup>19)</sup>ように求めることであり、〈答え〉とは選んだ結果を提示したものだ、という考え方ができる。

もちろん、私たちは全ての問いにおいて、答えを「選んで」いるわけではない。例えば足し算という問いにおいては、答えは「計算」するものであって「選ぶ」ものではない。しかし、実数の足し算であれば、実数という集合<sup>20)</sup>の中から〈答え〉として適切な数値を1つ見つけ出していることには違いがない。ここで注目するのは、〈答え〉を選ぶプロセス(例えば計算など)ではなく、〈答え〉がある範囲の中から選ばれる、ということだ。なぜなら、どのような範囲から〈答え〉を選ぶのかによって、問いの性質が異なり、答えさえも変わる場合があるからだ。

例えば、変数 $x$ の値が5よりも大きいか小さいかを問う問題であれば、答えは{5より小さい、5と等しい、5より大きい}といった集合から選ぶことになる。もし $x$ の値が5であれば〈答え〉は「5と等しい」になる。しかし、答えを{5より小さい、5以上}という集合から選ぶ場合は、 $x$ の値が同じ5であっても〈答え〉は「5以上」になる。

なにやら詭弁のように聞こえるかもしれないが、数学的な問い以外に目を向ければこんなことはいくらかでも生じる。例えば「これはどんな本か」という問いの〈答え〉を{単行本、文庫本、新書本…}という集合から選ぶ場合と{小説、ノンフィクション、学術書…}という集合から選ぶ場合では〈答え〉は異なる。このように、「どんな本か」という問いの言葉よりも、可能なく答え〉の集合の方が、問いの性質をより正確に表現している(何を問おうとしているのかがよく分かる)のだ。

以上のように、〈答え〉がどのような範囲から選ばれているのかに注目することは、問いというものを理解するうえでかなり有力なアプローチであり、実際そのような考え方に基づいて、問いの理論を構築しようとする研究も存在する。

入江は問いの意味論として、命題集合説と関数説の2つを紹介しており、このうち命題集合説は「問いの意味を、〈その問いの可能な答えの集合〉と考える立場」(p.61)であるため、ここまで説明してきたことと近い<sup>21)</sup>。ただ、命題集合説はその名の通り、集合の要素を命題(返

答文)だと考えており、それゆえ「可能な答えの集合」の性質がうまく特定できないという弱点を持っているように思う。そこで、返答文ではなく可能な<答え>の集合を想定し、その中から妥当なものを選ぶと考えてはどうだろうか。つまり、

{私は昨日東京に行きました、私は昨日大阪に行きました、…}

という集合からではなく、

{東京、大阪、…}

という集合からの選択だと考えるのだ。この集合を便宜的に「選択肢」と呼ぶことにしよう。このように選択すべき部分をより厳密に特定することによって、「選択」の性質が明確になるはずだ。

以上の考察から、暫定的な結論を、「問いとは選択肢の提示であり、問いに答えるということは選択肢の要素から妥当なものを選ぶことである」とすることができるだろう(ただし、選択肢の要素は<答え>である)。これは本当に正しいのだろうか。また、多様な問いのすべてに適用できるのだろうか。この点について次のセクションで考えてみたい。

### 3) 問いの分類

入江も参照している、「問いの推論」についての研究を発表したヴィシニェフスキは、問いを可能な答えの集合からの選択であると捉えて、問い(質問)を形式言語に導入しようとしているが、考察の準備として自然言語の問いを4つに分類している(Wiśniewski 2013: 5-12)。その内容は以下の通りだ。

#### 1. 開放条件質問 (open-condition questions)

選択肢に制限のない質問。「誰が散歩に行ったのか」(「誰」に入る人には制限がない)

#### 2. 限定条件質問 (delimited-condition questions)

選択肢が限定された質問。「ビルとメアリーとハリーのうちだれが散歩に行ったのか」

#### 3. 二者択一質問 (Choice questions)

選択肢が2つしかない質問。YES/NOで答える質問を含む。「ビルは散歩に行ったのか」

#### 4. 記述質問 (Topically-oriented questions)

答えとして記述を求める質問。典型的には「なぜ」や「どのようにして」を問う質問。

この分類からまずわかることは、記述質問の異質性だ。このタイプの問いは、「問いは選択肢の提示である」という公式が当てはまらない可能性がある。そこでこれについては後で詳しく論じることにした。

それ以外の問いは、選択肢の数に違いがあるものの、いずれも選択肢の提示という形式に収

まっている。そこでこれらをまとめて「選択質問」と呼んでおきたい。

選択質問の中の違いについて、ヴィシニェフスキは選択肢の数を重視したのだが、筆者はそれよりも重要な違いがあると考えている。それは選択肢の要素間の差異の性質だ。ヴィシニェフスキの提示する例は、いずれも要素間の差異にただ「違っている」という意味しか見いだせないが、選択肢の要素を〈答え〉であると考えれば、要素間に量的な違いが想定できるものもある。例えば、「あなたの所持金はいくらか」という問いへの〈答え〉には大小関係があるし、「いつ」という問いへの〈答え〉には日付にせよ時刻にせよ順序関係がある。このように選択肢の要素間に（少なくとも）順序関係<sup>22)</sup>がみられる問いを「量的選択質問」と呼ぶことにしたい。この中には、例えば長さや重さを問う質問など、答えが連続量の中の値であり、選択肢の要素を数え上げることができないものも存在するため、「選択質問」というネーミングに違和感を覚えるかもしれないが、他に良い案を思いつかないので当面はこの言葉を使いたい。計測や計算は基本的にすべて量的選択質問だ。

量的選択質問には、必ず順序関係（大小関係や位置関係など）を測定するための「ものさし」が必要だ。これは実際の測定用具などを意味しているのではなく、そのための「概念」が必要とされるという意味である。例えば、高さを問うには「高さ」という概念を、問う側も答える側も理解していなくてはならない。このことはのちに説明する「問いの語彙」について考える際に改めて説明したい。

量的選択質問に対して、選択肢の要素に順序関係が存在しない問いを「質的選択質問」と呼ぼう<sup>23)</sup>。例えば「誰が～したのか」という問いに対しては、「Aさん」「Bさん」「運転手」「私の兄弟」「知らない人」など様々な答え方があるが、答えが「人」であるという制限がある。また、それらの間には一般的には順序関係が存在しない。「どこで～したのか」とか「何をしたのか」も基本的に質的選択質問だ。

答えが複雑な記述になるような質問も、最終的に答えをいくつかのカテゴリーに分類することが想定されているなら、それは質的選択質問に準じるとみなしてよい。例えば、ある人がどうして死んだのか、という問いに対する答えとしては、死に至る経緯を詳しく記述するような答えももちろんあり得るのだが、それを最終的に「病気」「事故」「自殺」「殺人」などと分類することを想定しているのであれば、その際詳しい記述はいわば（死因を分類する問いに対して）下位の問い（以下「下位質問」）ということになるだろう。そのため、その記述の妥当性は分類に必要な情報を備えているかどうかという基準を持つようになる<sup>24)</sup>。

質的選択質問においても、答えを得るためには量的選択質問と同様に何らかのものさしが必要だが、その性質は量的選択質問と違ってかなり複雑だ。例えば先ほどの「ある人がどうして死んだのか」という質問に対して（質的選択質問としての）答えを得るために必要なものさしは、「死因」という概念だろう。この概念はいわば問いが提示する選択肢（集合）の「名前」であ

ると理解できる。この概念によって、答えになりうるものとそうでないものを識別することができるからだ。また、死因のように答えが抽象的な概念になる場合は、選択肢を構成する「病気（病死）」「事故（死）」などの要素についても理解する必要がある。つまり、この場合に必要なものさしは、「死因」という概念と「病死」「事故死」などの要素についての知識ということになる。

以上のように、問いを分類する基本的な枠組みとして、選択質問と記述質問、そして選択質問についてはさらに質的選択質問と量的選択質問、という分類体系を提案したい。もちろんこれは、あくまでも仮説的な枠組みであって、この分類のいずれにも含まれないものがないかどうか、あるいは分類が困難な問いがないかどうか、といった詳しい検討が必要だ。ただ、本稿ではそのような検討を十分に網羅的に行う余裕はないため、次のセクションから特に重要だと思われるものをいくつか取り上げて論じたい。

#### 4) 決定疑問と名前を問う質問

まず、質的選択質問であることには違いないが、特殊な意味合いを持つ質問を2つ取り上げたい。そのうちの1つは、決定疑問<sup>25)</sup> (YES/NOで答える問い) である。この質問は、入江も論じている通り (p.109)、焦点という概念を導入した場合にいくつかの解釈が可能だ。

例えば「あなたは食後にコーヒーを飲みますか」という問いについて考えよう。これはYES/NOで答えることができる問いだが、そのYES/NOがどの部分についてのものなのか(焦点がどこか)によって、意味合いが異なってくる。例えば、「食後」という部分についてのYES/NOなのかもしれないし、「コーヒー」という部分についてなのかもしれない。この違いは、「NO」であった場合にどのような返答文になるのかを考えてみるとより鮮明になる。前者であれば「いいえ、私は休憩時にコーヒーを飲みます」といった返答文だろうし、後者であれば「いいえ、私は食後に紅茶を飲みます」などになるだろう。

さらには、文章全体を命題ととらえてその真偽を問うているのだと解釈することもできる。その場合は(この文章では)答えが「NO」の場合にどの部分が「NO」なのかは確定しない。

以上のように、決定疑問という問いは、YES/NOが何についての判断なのかがしばしば曖昧であるという弱点を持つ。「問いは選択肢の提示である」という立場から考えると、決定疑問が提示する選択肢である {YES, NO} は、実際には何か具体的な選択肢 (例えば、{食後、それ以外のタイミング} とか {コーヒー、それ以外の飲み物} など) の代用なのだ。YES/NOで答えさせることは、何かをはっきりさせるための手段として用いられることもあるようだが、実際にはかえって物事を曖昧にしてしまう可能性もあるのだ<sup>26)</sup>。

ここで取り上げるもう1つの問いは、名前を問う質問だ。ここでの「名前」とは、固有名(人

名や地名など)もそれ以外の一般名称も含んでいる。

名前を問う質問は、多くの場合は通常の質的選択質問だと捉えて問題はない。例えば、「さっき私に電話したのは誰ですか」という問いの選択肢として、「Aさん」「Bさん」などの固有名があったとしても、これは通常の質的選択質問だと考えてよいだろう。しかし、初めて会った人に対して「あなたの名前は何というのですか」と問うて、その返答文が「私はAと申します」というものであった場合に、それを何かからの選択であると考えるのはやや無理がある。そのほかにも、子どもが「あれは何」と問うて大人が「ああ、あれは消防車」と答える場合も同様だ。どちらも<答え>である「A」や「消防車」にその時点ではほとんど意味がない。初めて会ったAという人物についてその場で見た印象以外には何も知らないだろうし、子どもが初めて聞いた「消防車」という言葉についても大人なら知っているべき知識をまだ持っていないからだ。にもかかわらず、名前を問うことに意味があるのは、それが「選択肢から選ぶ」というよりも「選択肢を作る(選択肢にラベルを付ける)」行為だからだろう。名前を知ることによって、その名前を手掛かりにして知識を蓄積し、その名前を問いの選択肢の要素や問うための前提条件として活用することができるようになる。つまり、(通常の)問いを可能にするための準備として、名前を問う質問が必要なのだ<sup>27)</sup>。

## 5) 漠然とした問い

効果的に問い(選択質問)を発するためには、先に説明したような「ものさし」が整備されていないとてならない。質量とか体積といったきちんとしたものさしを知らずに「大きさ」を問うても、漠然とした答えしか返ってこないだろうし、死因という概念やその分類を表す言葉を知らずに「どうして死んだのか」と問うても的確な答えが返ってくるかどうか分からない。

このように、ものさしの精度が低ければ有効な質問がしにくいのだが、場合によってはものさしがほとんどまたは全く存在しないまま、問いが発せられることもある。その際にしばしば使われる疑問詞が「何」(What)だ<sup>28)</sup>。

「～とは何か」という問いは、いわばオールマイティというか、ものさしが明確でなくても発することができるという意味では便利な表現だ。しかしその分、どうにも考える糸口がつかめず、どう答えてよいか分からない問いを生み出してしまふ。実は本稿の出発点として提示した「問いとは何か」という問いが、まさにそのような問いだ。

いきなり「問いとは何か」と問われても、おそらく多くの人はただ戸惑うばかりで、何を考えればよいのかも分からないだろう。そういう意味では、本来このような問いを立てることは望ましいことではない。それよりももっとものさしが明確な問いを立てるべきなのだ。例えば「問いの役割は何か」という問いであれば少しはましになるだろう。

にもかかわらず、「問いとは何か」といった漠然とした問いが必要になるのは、「どのような

問いを立てるべきなのか」ということも含めて検討したい場合や、そもそもどんなものさしが利用可能なのかも全く思いつかない、といった場合に、とりあえず「～とは何か」という問いを立てて探索的な検討を行うために、このような問いが立てられるからだろう。

では、「～とは何か」という問いは、どのようにして答えられるのだろうか。選択質問の場合はそれぞれの選択肢の妥当性を比較することが答えを出すための基本的な方法だ（もちろんそれ以前に計算や記憶の参照などもある）。しかし、明確な選択肢を持たない漠然とした問いではそのような方法は使えない。

この疑問に対して、筆者は現在のところ十分に包括的な答えを持ち合わせていない。そこで、あくまでも1つの事例として、本稿自体が「問いとは何か」という問いにどのように取り組んだのかを論じてみたいと思う（第5節）。

## 6) メタ質問

すでに説明したようにヴィシニェフスキは「なぜ」という問いを記述質問に分類しているが、私は基本的にはこれは質的選択質問に帰着させられるだろうと考えている。つまり、具体的な記述を答えとする「なぜ」の質問は、「理由」「原因」「根拠」などのものさしを持つ上位の問いに対する下位質問だと考えられるからだ<sup>29)</sup>。例えば「なぜ殴ったのか」と問われて「あいつが先に私を殴ったからです」と答えたなら、その答えは動機を問う上位の問いに渡されて、「返し」といった<答え>を得ることになる。

しかし、「なぜ」という質問は他にもっと重要な特徴がある。それは「なぜ」を問う質問文には、複数の焦点位置の候補が存在する（場合がある）、ということだ。例えば以下の問いを見てみよう。

あなたはなぜ食後にコーヒーを飲むのですか。

この問いは、「食後」に焦点があるという解釈もできるし、「コーヒー」に焦点があるという解釈も可能だ。前者の場合、「休憩時でもなく食前でもなく食後」にコーヒーを飲むのはなぜなのかが問われており、後者の場合は食後に「紅茶でもココアでもなくコーヒー」を飲むのはなぜなのかが問われている。

選択質問の場合、焦点は選択肢であり、そこから妥当なものを選ぶことが求められているが、この問いの場合は、どちらが焦点であってもそれはすでに選択されている。つまり、これらの焦点について問いはすでに答えられているのだ。

すでに問いに答えが与えられているのに、なぜ問いが成立するのか。それは、「なぜ」という問いが問い（と答え）に言及する問いだからだろう。例えば、「食後」が焦点であった場合、本来あったはずの問いと答えを補うと以下ようになる。

あなたはいつコーヒーを飲みますか。



私は食後にコーヒーを飲みます。

あなたはなぜ食後にコーヒーを飲むのですか。

焦点だけを抜き出せば、「いつ」に対して「食後」という<答え>が出され、その組み合わせ「いつ→食後」に対して「なぜ」と問うているということになる<sup>30)</sup>。

このように、問い（と答え）に言及する問い<sup>31)</sup>（これを「メタ質問」と呼びたい）は他にも様々なものが考えられる。例えば「あなたは～と答えただけ、それは本当ですか」と、相手の答えを確認する質問もメタ質問にあたる。

## 7) 記述質問

問いの分類についての考察を締めくくるにあたって、先にペンディングしていた記述質問について考えたい。

これまでもある程度説明してきたように、私は記述質問の多くは、選択質問の下位質問として位置付けることができると考えている。例えば、「あなたは東京までどのようにして行ったのですか」という質問に記述的に答える場合、それは交通手段という選択肢から1つまたは複数を選択する選択質問に帰着させることができるかもしれない<sup>32)</sup>。

また、上位の質問が複数あり、それらすべての下位質問となるように記述がデザインされる場合もある。例えば、出来事の記述においては、いわゆる5W1Hを明らかにするという要求がなされることがある。この場合、その記述は「いつ (When)」「どこで (Where)」「誰が (Who)」「何を (What)」「なぜ (Why)」「どのように (How)」といった問いに対する下位質問なのだ。

さらには、それらの選択質問から派生する問い（下位質問やメタ質問）もまた、記述を方向づけているかもしれない（例えば「誰が」という問いに答えを出すとともに、その根拠も示すなど）<sup>33)</sup>。

以上のように、多くの記述質問は、非常に複雑にはなるものの、原理的には選択質問に帰着させられる（それらの下位質問だと位置づけられる）と筆者は考えている。

それでは、すべての記述質問がそのように選択質問に帰着させることができるのか。この点について筆者自身にまだ迷いはあるものの、今のところは帰着させられない記述質問が少なくとも1種類はあると考えている。それが物語記述だ。

物語とは、複数の出来事を時系列に沿って記述したものであり、それらの出来事は1つのつながりの中に位置づけられて「物語」が構成されている。このような物語の記述は「どのようにして」などの問いに対する答えになる可能性がある。

あなたはどのようにして今の地位を築いたのですか。

私は貧しい家庭に生まれて苦勞をしたのだが、あるとき～という人に出会い～について学ぶ機会を得た。私はその人の下で懸命に勉強をして技術を身に付けていったが、あるとき

～という出来事が起こって…

このような記述も、例えば「家庭環境」や「指導者」「学習環境」といったものさしで上位の問いに帰着させることができるかもしれないが、それだけで記述された内容をすべて包括できるのだろうか。

私はそうは思わない。物語は様々な出来事がひとつながりのものとして語られることに意味がある。そのため、物語を個々の要素に分解してしまえば、物語としての性質が失われてしまう。

それでは、物語（ストーリー）を分類してカテゴリー化するような上位の問いを想定してはどうだろうか。確かにそのようなカテゴリー化は主として学術的な試みとして行われてはいるだろうが、物語の語り手はそのようなカテゴリーを意識することはないはずだ。そのため、物語記述はやはり選択質問には帰着させられないのだと筆者は考えている。

ただ、筆者が迷っているのは、これを問いへの答えであると位置づけてよいのかどうか、という点だ。もしかしたら、音楽や絵画と同じような「作品」を作る行為（質問への応答ではない行為）だと考えたほうが良いのかもしれないし、それらとの中間的な存在だと考えたほうが良いのかもしれない。この論点は今後の課題としたい。

以上で、問いの分類についての議論を終えることにするが、先にも書いたように、筆者はこれが十分に網羅的であるとは考えていない。しかし、問いを「選択肢の提示」であるとする見方が、問いについての考察の理論枠組みとして非常に有効であると示すことはできたのではないだろうか。

## 8) 問いの語彙

この節の議論からは、当初から予告していた、問いの立て方の参考になるような知見を引き出すことができたと思う。それは、問いは「良いものさし」を用いて問う（問いを立てる）必要がある、ということだ。「～とは何か」や「なぜ～なのか」といった問いは、ものさしとしての精度が低く、YES/NOを答えさせる質問も曖昧さを免れない。「5W1H」という合言葉が出来事を記述する際のノウハウになりえるように、問われていることを明確にするためには、精度の良いものさしを用いる必要があるのだ。そのため、うまく問いを立てるためには、ものさしについての豊富な知識を持つことがアドバンテージになる。

それでは、私たちはどのようにしてもものさしについて知識を保持しているのだろうか。それは、ものさしを表す言葉、すなわち「問いの語彙」によってである、と私は考えている。

ここまでの議論で様々なものさしを例示してきたが、それらを表す言葉は全て「問いの語彙」だ。量的選択質問のものさしとしては、「高さ」「質量」などを取り上げたし、質的選択質問の

ものさしとしては、「死因」「理由」「原因」などがあつた。これらの言葉は、いわば問いの「核心」であり、それらを使用するだけで、どのような問いであるのかを明確にすることができる。例えば「高さは？」とか「死因は？」といったように、「は？」を付けるだけで十分に質問として機能させることができるのだ。

質的選択質問に関わる問いの語彙の中には、その言葉に該当するか否かが重要な問いとなるようなものがある。例えば「犯罪」「社会問題」などの言葉<sup>34)</sup>がそうだ。これらは「犯罪か?」「社会問題か?」といった表現で問いとして機能する。

疑問詞のうちのいくつかも、問いの語彙であると考えられる。「どこ」「誰」は明確に質的選択質問に関わる問いの語彙であるし、「いつ」は量的選択質問に関わる問いの語彙だ。ただ、「なぜ」「どのように」などは問いの語彙としてはものさしの精度が低いし、「何」は先述の通り曖昧過ぎる。

形容詞は基本的に「～か?」と問える問いの語彙であり、形容詞語幹+「さ」で名詞にすれば量的選択質問を作る問いの語彙になる。また、別の問いの語彙が表す選択肢の一部となっている場合も多い。例えば「甘い」は、「甘いか?」「甘さは?」と問えるし、「味」という選択肢の要素の1つ<sup>35)</sup>になる。

量的選択質問に関わる問いの語彙については、順序や大小の基準、単位（ものさしの目盛りにあたる）、場合によっては判定・測定の方法などの知識が必要になるだろう。質的選択質問に関わる問いの語彙については、選択肢の範囲、分類の基準、主要な選択肢、そして判定方法などの知識が考えられる。

問いの語彙は、私たちが問いという思考やコミュニケーションの方法を共有するための方法である<sup>36)</sup>。そのため、問いの語彙についての知識を十分に持ち、なおかつその使用に習熟することが、うまく問いを立てるための知識・技術として、有効であると思う。

### 3. 問いは言語行為なのか

#### 1) サールの言語行為論とそれに対する入江の批判

ここまでは主として思考（推論）における問いを念頭に置いて議論をしてきたが、問いは私たちのコミュニケーションにおいても重要な意味を持つ。そして、コミュニケーションとしての「問い」についての考察を行う上で、足掛かりになる可能性があるのが言語行為論だ。

言語行為論はオースティンが提唱し、サールが発展させた考え方だが、本稿では入江に倣ってサールの言語行為論を中心に扱う。

実は奇妙なことに（少なくとも筆者はそう感じる）、言語行為論における「質問」の扱いは非常に小さい。問うこと（質問すること）は、私たちの言語コミュニケーションの中でかなりの比重を占めているはずだが、それが言語行為（発語内行為）の主要な分類の中に現れていな

い（これはオースティンも同様）のは何故だろうか。

この点について、入江はサールが質問を「情報提供の依頼」だと捉えていると説明し、それを批判している（p.166-172）。入江の批判を説明するために、まずサールの発語内行為を確認しておこう。

サールの言語行為論の中心は発語内行為の分析であり、さらに発語内行為という概念の核心となるアイデアは、それが「命題内容（propositional content）」と「発語内的力（illocutionary force）」によって構成されているというものだ。

例えば基本となる命題内容（p）を「私は明日東京に行く」であるとしよう。これに発語内的力の1つである「命令」（!）を加えると、「（あなたは）明日東京に行きなさい」という命令文になる。つまりある命題内容についての命令文を「！（p）」と表現できるというわけだ。命令以外にも約束（C）を加えると「私は明日東京に行くことを約束します」（C（p））となるし、願望（E）なら「あなたが明日東京に行ってくれたらいいなあ」（E（p））などとなる。それでは、質問文は質問という発語内的力（?）を使って「あなたは明日東京に行きますか」（?（p））と表現できるのだろうか。

入江はそのような表現は望ましくないと主張する。なぜなら、命令や約束や願望などそれぞれについても質問が可能だからだ。

例えば命令文「明日東京に行きなさい」（！（p））に対しては、「明日東京に行けと命じますか」（?!（p））という疑問文が可能だし<sup>37)</sup>、約束の場合も「あなたは明日東京に行くことを約束しますか」（?C（p））という疑問文が成立する（p.170-172）。

以上のことから入江は、質問という発語内行為は「他の発話の発語内行為を指定している」ために「質問発話はユニークなものであり、質問以外の発語内行為とは異質である」（p.172）と結論付けている。

しかし、筆者は入江のこの反論には問題があると考えている。なぜなら、彼はサールと同じく、問いの基本的な性質を見落していると思うからだ。このことを説明するために、いったんサールの「質問は情報提供の依頼である」という見解に戻りたい。

## 2) 質問は情報提供の依頼なのか

質問は情報提供の依頼だという主張に対しては、なんとなく違和感を覚える人も多いのではないかと思う。そしてその違和感は、おそらく次の例について考えるとより明確になるのではないだろうか。

例えばあなたが誰かから「238 + 129はいくつになるか」と問われたとする。これはもちろん質問なのだが、「情報提供の依頼」だと言えるだろうか。確かに「答えを私に言いなさい」という部分に関しては情報提供の依頼と言えなくもないが、それ以上に「答えを出しなさい（計

算しなさい)」という意味合いの方が通常は強いのではないだろうか。

つまり、言語コミュニケーションとしての質問は、情報提供の依頼という側面だけでなく、思考（推論）の依頼という側面も持っているのだ。質問の中には思考の要素が非常に小さくて単なる情報提供依頼のように見えるものも確かにあるが（例えば「あなたの名前は」など）、それでも私たちはより適切な答え方を「考えて」（妥当性を基準にして）答えているはずだ。ましてや、クイズとか数学の試験<sup>38)</sup>などのように、どう考えても「考える」ことが主たる要素であるものも少なくない。

さらに言えば、第1節で明らかにしたように、問いは推論を方向づけるものだ。つまり、問う（質問する）という活動が主として要請しているのは情報提供ではなく推論（思考）なのだ。

このように考えると、質問は情報提供の依頼であるという考え方は全般的な外れなものであると言わざるを得ないし、推論という私たちにとって大切なとなみを不当に貶めるものであるとさえ言いたくなる。

しかし、実はサールは初めから質問をこのように位置づけていたわけではなく、ある理由でそのようにせざるを得なかったのではないかと私は考えている。次のセクションではこのことを説明したい。

### 3) 命題中心主義

サールは比較的初期の文献においては質問という発語内行為も想定した議論をしている。例えば1969年に発表した文献では、主張（ $\vdash(p)$ ）、依頼（ $!(p)$ ）、約束（ $Pr(p)$ ）、警告 $W(p)$ と並んで、「イエスカノーかを尋ねる質問」を $?(p)$ と表現している（Searle 1969=1986: 54）。

ここで注意してほしいのは、「 $?(p)$ 」を決定疑問に限定している点だ。例えば $p$ を「私は昨日東京に行きました」とすると、（その内容を崩さずに）質問という要素だけを付け加えると「あなたは昨日東京に行きましたか」という決定疑問になることから、それは十分納得できるのだが、 $p$ を応答文とする質問はそれだけではない。「あなたはいつ東京に行きましたか」や「あなたは昨日どこに行きましたか」という質問（補足疑問）も考えられるからだ。

サールの説明では、そのような質問の場合は命題内容の代わりに命題関数（propositional function）を使わなければならない、ということだ（Searle 1969=1986: 54）。命題関数とは命題を構成する項の一部が変項となっているものであり（例えば「あなたは昨日  $x$  に行きました（ $x$  が変項）」といったもの）、変項に具体的な値が代入されることによって、命題としての真偽が確定する。

サールの説明は少しわかりにくいかもしれないが、本稿でこれまで検討してきたことを踏まえば、もっとすっきりとした説明ができる。第2節で説明したように、相関質問によって発

話の焦点が定まる。ということは、発話（応答文）から相関質問を特定するためには、その発話のどこに焦点があるのかを特定する必要があるのだ。命題という言葉に置き換えると、その命題の中のどこが焦点（=変項）なのかを特定しなければ、質問を特定できない、ということになる。

これはおそらく、サールにとって悩ましい問題だっただろうと想像できる。先に説明したように、サールは発語内行為が命題内容と発語内的力によって構成されているという理論枠組みを提示する。しかし、質問はそのような枠組みには当てはまらない。質問を特定するには命題内容に加えて変項の位置という情報が必要だからだ。

サールが、変項の位置という情報を組み込んだ理論枠組みを実際に検討したのかどうか私にはわからないが、結果としては、そんな面倒なことをしなくても済む方法、つまり質問を主要な発語内行為としては扱わず、他のカテゴリー（指令型）の一部であると位置づけることを選択した（Searle 1979=2006: 22）。このことによって、一見問題が解決したかのように見えるかもしれないが、そうではない。ただ単に扱いが小さくなって見えにくくなっただけだ。実際には質問をうまく特定できないという問題は何も解決していない。仮に質問が情報提供の依頼であったとしても、提供を依頼している情報がどのようなものなのかを命題だけでは特定できないからだ<sup>39)</sup>。

以上のように、筆者はサールの言語行為論が質問をうまく捉えられないという点において完全に破綻していると考えている。これは邪推というか、さしたる根拠もなく言うことだが、サールがこのような判断をした背景の1つには、「命題中心主義」があったのではないだろうか。命題は言うまでもなく平叙文の記述内容を表現したものであるので、入江が「平叙文中心主義の誤謬」を指摘するなら「命題中心主義」というとらえ方もできるのではないだろうか。

もちろん、筆者は「命題中心主義」が全面的に間違いであると主張するつもりはない。命題は、「回答確認推論」（第1節）のためには非常に有用な概念だ。しかし、「問題解決推論」を理解するためには、「命題」という枠組みは邪魔になる（その中の「焦点」にまで踏み込まなければならない）。人々のコミュニケーションを表面的にではなくその含意まで理解しようとする言語行為論には「命題中心主義」はそぐわないのではないだろうか。

#### 4) ふたたび入江のサール批判について

それでは、これまでの議論を踏まえて、ふたたび入江の反論に戻って考えてみよう。まず、入江は上記のサールの枠組みの問題点を克服しているのだろうか。

この点に関しては、入江もサールと同様の問題を抱えていると言わざるを得ない。彼は言語行為論に関する議論においても決定疑問と補足疑問を区別しており、命題 p を答え（返答文）とする補足疑問を WH (p) と表記する (p.172)。しかしそうすると、同じ p に対して複数の

WH (p) ができてしまう。実際入江はそのことを以下のように書いている。

例えば p を「これはリングです」とするとき、「どれがリングですか？」や「これは何ですか？」が WH (p) となる。(p.172)

これは、サールが補足疑問の場合には命題内容の代わりに命題関数を使わなくてはならないと述べたことと、全く同じである。ただ命題関数にするだけでどこが変項(焦点)なのかを示さなければ質問を特定できず、だから WH (p) が表す文が複数できてしまうのだ。

しかし、このような(かなり大きな)問題点を持ちつつも、入江の反論には見るべき点がある。それは、問いが「他の発話の発語内行為を指定している」(言い換えれば答えとして想定できる)ため、他の質問とは異質であるという主張だ。私はこの主張自体については大筋で同意できると思う。

まず、発語内行為のほとんどは、平叙文で記述できる。ということは、発語内行為を示す文の内容を命題だと考えても差し支えないということだ。例えば約束の場合であれば、「私は明日東京に行くことを約束します」を C (p) ではなく、これ自体が p だと考えることができる。ということはこの p を返答文とする質問が想定できるということだ。この場合は「あなたは明日東京に行くことを約束するか」という質問になる。これは願望とか宣言とか感謝などでも基本的に同じだ<sup>40)</sup>。ただし、命令文で表される命令という発語内行為だけは別だが<sup>41)</sup>、これについては後で説明する。

(命令以外の)すべての発語内行為を、それ自体が命題であるとして一緒にたにするのは、あまりにも乱暴な議論だと思えるかもしれない。しかしそのような扱いをするのにはもちろん理由がある。それはそれらすべてが質問に対する返答だと考えることができる、ということだ。

第2節で提示した、平叙文が問いの条件と〈答え〉の合成であるという見解を思い出してほしい。これはもちろん、基本的にすべての命題に当てはまることだと私は考えているが、ただ「問い」が実際に必ず存在しているとは限らない。平叙文を発話する側は、(実際に問われていなくても)何らかの意味で「問われうる」とか「問われるべきだ」などと感じている、つまり問いを意識していることが前提になっている、という意味なのだ。

例えば約束について考えてみよう。私たちが約束をするのは、何かを自分が本当にするかどうかが相手が疑っている(あるいはその可能性がある)場合に限られる。もしそのような疑いが一切ないのであれば、そもそも約束などする必要がないだろう。つまり、約束が問われうることがらであるから約束の発話はあるのだ<sup>42)</sup>。約束は約束という独立した「発語内行為」ではなく、約束するかという問いに対する「答え」だと考えるべきだろう。これは願望でも宣言でも感謝でもそうだ。「あなたは何を望むのか」とか「あなたは～を望むのか」などと問われうる状況であるときに限って私たちは願望を口にすることができるし、宣言をするかどうか問われうる状況でなければ宣言などしない。感謝についても、「私が出したことについてあなたはど

う感じているのか」と暗黙のうちに問われている（問われうる）から、私たちは感謝の言葉を述べる。これらもすべて何らかの問いへの「答え」なのだ。

逆に言えば、平叙文として文法的に問題のない文であっても、それが問われる可能性がなければ私たちはその文を実際に発話することはない。例えば「これはボールペンです」という簡単な文を実際に発話したことがある人はどれくらいいるだろうか。もしあるとしても、まだ言葉をよく知らない子どもに教えるときか、一見するとボールペンには見えないボールペンを所持している人などに限られるだろう。こういったことから、問われうることを含まない平叙文はそもそも発話する意味がなく、実際に発話されないことがわかる。

以上のことから、入江による質問の異質性についての主張は、筆者には大筋として受け入れられるものだが、命令の扱いについては、大きく見解が異なっている。入江は命令（行為指示型）を答えとする質問もあり得るとし、その例として「～ことを命じますか？」という質問を挙げているが（p.170）、これに対する答えは「命じます」であって「～しなさい」という命令文にはならない。筆者は命令だけは質問への答えにはならず、そのため別扱いにしないではないと考える<sup>43)</sup>。

最後に、サールと入江が共通に抱えていた問題について、本稿の対案を明らかにしておこう。

といっても、実は簡単な話で、基本的に「命題中心主義」から脱却すればよいだけのことだ。平叙文で表現できるすべての発語内行為は、何らかの問い（相関質問）への答え（応答文）であり、（命題ではなく）「問いの条件＋＜答え＞」と記述することができる。相関質問は「問いの条件＋選択肢」だ。質問と応答をそれぞれ独立した発語内行為とみなすのではなく、質問と応答の組み合わせをセットにして分析の単位とする<sup>44)</sup>。

もし、オースティンやサールが取り組んだ発語内行為の分類に相当することをしたのであれば、問い（選択肢）の性質を調べればよい<sup>45)</sup>。つまり、第2節で行った問いの分類（あるいは問いの語彙の分類）をすれば良いのだ。本稿のような形式的な分類ではなく、内容に関する分類（例えば、事実に関する問いとか、意思に関する問い、認識に関する問い、感情に関する問いなど）を行えば、言語行為論の分析に近くなるかもしれない。

この節では、サールの言語行為論を検討することから始めて、最終的に（平叙文で表現できる）すべての言語コミュニケーションは質問・応答の組み合わせとして理解することができる、という結論に至った。これはかなり強い主張であり、そう簡単には納得できない人も多いだろう。そして、その最大の理由として考えられるのは、問いが実際には存在しないことが多い、ということではないかと思う。

平叙文が何らかの問いに対する答えだと主張するのであれば、その問いはどこかに存在しているはずだ。しかし、それは実際には発話されていないことが多い。それでもなお、問いに対



する答えだと主張できるのか。

この疑問に対する答えとして私が想定しているのが、「問いの先取り」という概念だ。

#### 4. 問いの先取り

##### 1) 問いの先取りとは何か

まず、問いの先取りの具体的なイメージをつかんでもらうために、最も簡単な例の1つだと思われる、自己紹介について考えてみたい。

「私は富山大学の佐藤です」という自己紹介は平叙文の形で語られている。すでに説明したようにこれは何らかの問いに対する答えであり、その問いとは「あなたは誰ですか」というものだ。しかし、自己紹介が実際に「あなたは誰ですか」と問われてから行われることはほとんどない。もしそのような事態になれば、「失礼しました。申し遅れましたが私は…」などと言訳をすることになるだろう。この事例からわかるように、問いの先取りとは、たまたま問われる前に答えてしまったということではなく、状況によってはむしろ先取りをすることが当然とされる場合もある。そのため、どのような場合に問いの先取りが行われるのかを理解することが必要だし、それはコミュニケーション技術の1つの要素であるはずだ。

また、問いを先取るということは、ただ単に「問われうる」ことが分かっているだけではなく、「何が」問われているのかも理解する必要がある。先ほどの自己紹介では、所属と名前を述べたのだが、状況（問われていること）によっては、担当している仕事や地位であったり、趣味や出身地と言ったプライベートなことであったりと、多様な自己紹介が考えられる。これもまた、問いの先取りという技術の1つの側面だ。

##### 2) 問いの先取りが行われる理由

それではまず、どのような場合に問いの先取りが行われるのかを考えたい。この点についてはすでに論考を発表しているので（佐藤 2019: 96-99）、それも参考にしてほしい。

まず、問いの先取りが行われるのは、大きく分けて問いが予想される場合と、問いを要請する場合が考えられる。

予想される場合とは、相手がこのような問いをするだろうという予想がなされ、その問いを先取りして返答文である発話がなされることを指している。これはさらにいくつかのパターンに分類できる。

まず1つめは、問いが制度的に予想されるパターンだ。先の自己紹介はまさにその例であり、自己紹介をすべき場面（あなたが誰なのかを問われる場面）は、様々なルールや慣習によって十分に予想できる。そして、これも自己紹介の例からわかるように、制度的に問いが予想される場面では、先取りができるというより、先取りをしなくてはならない場合が多い。

2つめは、問いが心理的に予想されるパターンだ。相手が知りたがっていることを先取りして答えてしまう。何に興味を持ちそうなのかを予想して話題を振る。そういうことは珍しくないだろう。先に示した約束の例は、相手の「あなたは本当に～してくれるのですか」という問いを（心理的に）予想して「大丈夫です」と答え（これも省略されるかもしれない）、さらにそれを補足する形で「約束します」という発話になるのだと考えられる。

3つめは、問いが論理的に予想されるパターンだ。何かの説明をしていて、そこから当然（論理的に）生じるであろう疑問を先取りして答えてしまう。そういったことは、ある程度の長さになる説明をする場合には、しばしば行われているはずだ。私が文章を書く際にはもちろんそのようなことをしているし、本稿でも同じだ。

予想による先取りは、多くの場合先取りそれ自体はそれほど難しいことではない。しかし、もう1つの、問いを要請することによる先取りは、かなり複雑だ。

問いを要請する場合とは、相手がこのような問いをするべきだという規範的な判断をし、さらにその問いを先取りして返答文としての発話をするパターン（規範的な要請）と、相手にこのような問いをしてほしいと願い、それを先取りするパターン（欲求・願望による要請）が考えられる。

規範的な要請の例として、「もうお昼ですよ」という発話を考えてみよう。この発話は時刻についての問いに対する答えだと考えられるので、問いの先取りをしていることは明らかだ。では、語り手は相手が時刻を問うことを予想してそれを先取りしたのだろうか。もちろんその可能性もあるが、例えば相手が何かに夢中になっていて時刻を気にしている様子もないのに、「もうお昼ですよ」と言うことはあるだろう。その場合は予想による先取りではなく、相手が時刻を「問うべき」と判断し、それを先取りすることによってこのような発言がなされたのだと考えられる。

願望・欲求による要請とは、相手に「問うてほしい」と要請することだが、「知ってほしい」ではないことに注意してほしい。例えば親しい誰かに「今日はこういうことがあったんだ」と話しかけることを考えてみよう。もちろんこれは「今日は何があったのか」という問いを先取りしたものだが、その問いは必ずしも予想されたものではないかもしれない。むしろ、そう尋ねてほしいという願望を先取りしたものだとも考える方が自然だろう。ということは、そのように言われた人は、相手の望みが「知ってほしい」ではなく「尋ねてほしい」（関心を持ってほしい）であることを踏まえて、ただ話を聞くだけでなく、関心を持って（適切に質問しながら）聞くべきだろう。

予想による問いの先取りでは、問いは「なくて良い」あるいは「ない方が良い」ものであるのに対して、問いの要請による先取りでは、問いはむしろ「本来あるべき」「あった方が良い」ものだという違いがある。

### 3) 先取りの技術

以上のような整理を踏まえて、私たちがどのように問いの先取りをしているのか。また、その際にどのような技術を用いているのかを考えたい。ただし、この点について筆者はまだ十分に包括的な見通しを持っておらず、いくつかの事例に基づいた断片的な考察にとどまることをお許しいただきたい。

まず、私たちは問いの先取りを行う際に、どのような問いを先取りしているのかを示す必要がある（場合がある）。まず以下の例文を見てほしい。

あなたは昨日どこにいましたか。

東京にいました。

この質問と応答は容易に理解できるが、それでは、次の質問応答はどうだろうか。

あなたが昨日の事件の犯人ですか。

東京にいました。

この答えは少しわかりにくい。それは、この応答文がどのような問いを先取りしているのかを示していないからだ。ではどうすれば先取りをした問いを示すことができるのか。答えは簡単で、平叙文にすればよい。

あなたが昨日の事件の犯人ですか。

私は昨日東京にいました。

この応答文であれば、「あなたは昨日どこにいましたか」という問いを先取りしていることがかなり判断しやすくなる。つまり、いわゆる「アリバイ」を主張しているのだ。

以上のことから、ある意味では平叙文は問いの先取りのための表現だと言えるかもしれない（もちろんそれがすべてではないが）。昨今はSNSなどの影響もあって、私たちが（完全な）平叙文を発話する機会は減っているかもしれない。しかし、平叙文を十分に使いこなすことができなければ、問いの先取りを含むコミュニケーションに苦勞するかもしれない。

それでは、次はもう少しだけ高度な、要請による先取りの例を示そう。例えばあなたが自分より立場が上の人に、「この部屋は暑いね」と言われたらどうするだろうか。おそらくエアコンの温度を調整したり窓を開けて風を通したりして、涼しくなるように配慮するだろう。それはもちろん間違いではないのだが、どのように問いを先取りしているのかを考えれば、他にも言うべきことがあるかもしれないことがわかる。先の発言に先取りしている問いを補えば以下のようなになるだろう。

この部屋の気温はどうですか。

この部屋は暑いね。

この場合の問いの先取りは、問いの要請によるものだ。願望・要求による要請（温度がちょ

うど良いか尋ねてほしい)という可能性もあるし、規範的要請(尋ねるべきだ)という可能性もあるだろう。そして後者の場合、必要な問いを発しなかったことに対する非難というニュアンスを含んでいるかもしれない。以上のことから、「この部屋は暑いね」という発話に対しては「失礼しました」といった謝罪の言葉が返されるのだ<sup>46)</sup>。

さらに高度な(微妙な)事例も検討したい。以下の発話はどのような問いを先取りしているだろうか。

(A氏による同僚のB氏に対する発言について)

A氏はB氏を「そんなやり方はだめだ」と叱った。

普通なら発言内容が焦点だと考えられるので、先取りしている問いは「A氏はB氏をどんなふう叱ったのか」といったものだと考えられる。しかし、A氏とB氏は同僚なので「叱った」という上下関係を前提としたような表現は一般的には似つかわしくない。この時、上の発言をした人はA氏が何らかの意味で「偉い」とか「有能だ」などと思っているのかもしれないが、それが他の人に共有されているとは限らないとすればどうだろうか。

「叱る」というのは本来A氏の主張であり、「A氏はB氏に何をしたのか」という(先取りされた)問いへの答えである。しかしそれは、他の焦点を前面に出すことによって隠されている。A氏は上の発言をすることによって、「A氏がB氏を叱った」という部分を問いの条件として提示し、そのような条件を設定した問いが「予想される」ことからそれを先取りしているという状況を作ることができる。あたかも「叱る」という言葉の背景にある「A氏がB氏よりも上の立場である」という認識が共有されているかのように見せているのだ。もちろん、「叱る」という言い方を批判することは可能だが、発言内容に関心が集まれば、そのような批判はかき消されてしまう<sup>47)</sup>。

以上のように、問いの先取りは、(やり方によっては)本来問われるべきことをあたかもすでに結論の出た既定の事実であるかのように見せることを可能にするのだ。逆に言えば、それを見抜くには発話のどの部分が「先取りされた答え」であるのか注意する必要があるということだ。

最後に、問いの先取りを「期待する」ことによって、相手から情報を引き出す方法を見よう<sup>48)</sup>。

「冷蔵庫に入れておいた私のプリンがない」(特定の人物に目を向ける)

この発言は明らかに何かを問おうとするものであり、目を向けられた人はそれに答えなくてはならない。例えば、「ごめんなさい。私が食べました」とか。もちろんこれも、「あなたが食べたのではないか」といった問いの先取りだ。

ここで考えてほしいのは、発話者は何故「プリンがない」までしか言わず、実際に問いを発しなかったのか、ということだ。言い方を変えると、あえて問いの先取りを「させる」理由は何だろうか。

それは相手に先取りする問いを選ばせるためだろうと筆者は考える。先ほどの例では、予想できる問いは複数のものを考えることができる。「あなたが食べたのではないか」という問いもそうだが、もう少し穏やかに「あなたはプリンがなくなった理由を知らないか」という問いも予想できるだろう。そして、その中からどれを選ぶのかは相手にゆだねられているのだ。

相手に問いを選ばせる理由はいくつも考えられる。例えば本当は相手が食べたのではないかと強く疑っているが、それを前面に出すと角が立つので控えているとか、あえて疑いを前面に出さないことによって相手をごまかす余地を与えているとか、逆にそう見せかけて、相手の誠実さを試しているとか。つまり、問いを口に出さないということは、自分がどう思っているのかを相手に悟らせないというメリットがあるのだ。そのため、言われた方は相手の手札を想像しながら対応しなくてはならない。しらを切りとおす余地はあるのか、ここは正直に認めたほうがいいのか、などと。このように想像すると、この場面ではなかなか高度な心理戦が行われているのかもしれない。

このことからわかるのは、問いの先取りはコミュニケーションに不確実性をもたらすのだが、場合によってはその不確実性さえもコミュニケーションの1つの手段として活用されることがある、ということだ。

以上の事例から、問いの先取りという概念が私たちのコミュニケーションのありようを読み解いたり、その技術を確認して活用したりするために、非常に有用であることを明らかにできたのではないだろうか。

ここで取り上げた事例は、まだほんの思い付きで集めたようなものなので、これから様々な事例をについて分析する余地があると思う。特に会話分析にこの概念を持ち込めばいろいろと面白い研究ができるのではないだろうか。

## 5. 「問い」についての問いの立て方

最後に、これまで予告していたように、「問いとは何か」という問いを本稿がどのように扱ったのかを事例として分析してみよう。

本稿は、「問いとは何か」という漠然とした問いを出発点として、それをより生産的な問いに置き換えていこうと試みた。「Xとは何か」という問いについて考えるための手がかりは、Xという言葉か、(Xが具体的な物や活動などであれば) Xという言葉が指し示す対象しかない。「問いとは何か」の場合は「問い」という言葉そのものか、私たちが実際に行う質問という活

動になる。本稿では前者、つまりすでに「問い」について語られていること、具体的には問いについてのまとまった論考である入江の著作を足掛かりにしたわけだ。

しかしそれだけではまだ、どこに生産的な問いを見出せばよいのかわからない。そこで、有効な問いを見出すために（問いを立てるために）筆者が用いた方法は以下の3つである。

### 1) 類推と否定への注目

筆者がまず注目したのは、問いは前提のようなものだという入江の主張だ。ここで「のようなもの」と表現したのは、入江は問いを<前提>と表記したが、論理学で通常用いる「前提」とは意味が異なると説明しているからだ。つまり問いは前提のようなものではあるが、厳密には前提ではない。実は入江はそれ以前の文献でも同様の主張をしており（入江 2014: 6）、それを見たときから筆者はこの点が気になっていた。

曖昧な「～とは何か」という問いに答えるためには、何かになぞらえたり、類似している何かを参考にしたりすること（類推）が有力な方法の1つだ。そしてさらに、その何かとは異なること（否定）がはっきりしていれば、どこが異なるのかという問いが、考察の糸口になる。ただ単に「異なる」のではなく、「似ているけど異なる」ことが、違いの意味を際立たせるのだ。

問いは前提のようなものだが前提ではない、ということは、問いは前提とは何かが違う。その何かとは何だろうか。この問いを足掛かりにして、第1節は基本的に「問い」と「前提」という対比をモチーフに展開する。そして議論は「妥当性」「真理性」という対比を経て、「問題解決推論」と「回答確認推論」という2種類の推論が存在するという結論に至るわけだ。

否定に注目する理由は他にもある。それは、一般的に肯定文による表現よりも否定文による表現の方が、そこに強いこだわりが秘められている可能性が高いということだ。例えば、「今日はいい天気だ」という表現と「今日は雨が降っていない」という表現を比べてほしい。後者の方が、その発話に何か意味があるのではないかと思えるのではないだろうか。これは、否定文を用いることで、「～である／～でない」という選択肢がより強く意識されるからであり、本稿で説明してきたように選択肢の提示こそが問いであるからだ。

### 2) 関連への注目

次に筆者が注目したのは、問いと焦点位置が関連しているという入江の主張だ。ここで「関連」という言葉を使ったのは、因果関係や目的／手段などの様々な種類の関連性をすべて対象に含めようとしているからだ。関連性に注目するのは、そのことによって「～とは何か」という漠然とした問いを、「～とは〇〇に関連した何かだ」といった形に変換して、考えるための足がかりを得ることができるからだ。

関連を見つけるためには、まず選択肢、つまり問いが存在していなくてはならない。本稿の

場合は焦点位置（はどこか）という問いがある<sup>49)</sup> からこそ、それと「問い」との関連が見いだされたのだ。

入江が主張する問いと焦点位置との関連とは、「相関質問によって発話の焦点位置が決まる」というものであり、因果関係でもないし、目的と手段という関係でもない。それではどのような関連なのかと考えを進めることによって、「質問とそれに対応する答え」という関連、つまり焦点は質問への答えそのものである（だから焦点位置が決まる）、という結論に行き着く。

このアイデアは、問いについて考えていくための非常に重要な布石になった。本稿ではここから、「平叙文の意味は問いとの関連で決まる」という入江の考え方をより推し進めて最終的には「問いの先取り」に至る議論を展開するとともに、答え（の集合）によって問いを形式的に分類するという考え方から、「問いの語彙」の分析に至る議論を導いた。

### 3) 分類への注目

最後に筆者が注目したのは、問い（質問）は言語行為（正確には発語内行為）の分類の1つであるという主張だ。分類は言うまでもなく問いの語彙の1つの形だ。つまり、「発語内行為」という言葉は問いの語彙なのだ。

分類への注目は、例えば「Xとは何か」という問いを立てたときに、「Xは～の分類の1つだ」という形と、「Xを分類すると～などになる」という形の2種類が考えられるが、どちらも重要だ。「問い（質問）は発語内行為の分類の1つだ」というのは前者に当たる。

「質問は発語内行為の1つ」という主張が重要なのは、それは「質問（問い）とは何か」という問いへの直接的な答えになり得るからだ。そのため、この主張の検討は最優先課題になるだろう。

本稿では、質問を発語内行為の1つだと位置づける見解を否定した（というよりその前提となる発語内行為という概念の枠組みを否定した）。そしてその議論は、すべての平叙文発話を質問への応答であると位置づける考え方につながった。

なお、これは入江の見解に基づいたものではないが、「質問の分類」についての議論も本稿では行っている（第2節）。

このように振り返ってみると、本稿は「問いとは何か」という漠然とした問いから出発しつつも、探求の方法としては決してアクロバティックなものではなく、むしろかなり手堅い、堅実な方法によって考察が進められていることを、理解していただけるのではないだろうか。

ただ、それが可能になったのは、問いについて様々な観点から探求した入江の業績を足がかりにすることができたからに他ならない。本稿では、入江の見解に異を唱える箇所も多々あったが、仮にその異議が正当であつとしても、そのことによって入江の業績の意義が損なわれる

ことはないと思う。

## おわりに

最後に、本稿の主張を簡単にまとめておこう。

筆者が「問いの基礎理論」として本稿で提案したことは、以下の4点にまとめることができるだろう。

1. 問いは思考（推論）を方向付ける。
2. 問いは選択肢の提示であり、選択肢の性質は問いの語彙によって共有されている。
3. 平叙文は「問いの条件+答え」であり（命題中心主義の誤謬）、問いと答えをセットにして考えなくてはならない。
4. 問いはしばしば先取りされており、先取りされた問いを補うことによって、コミュニケーションをより正確に理解できる。

もちろん、まだまだ細かい部分について議論の余地は多々あるが、大筋としては揺るがないだろうと筆者は考えている。

これらの理論は、冒頭でも書いたように、私たちの思考やコミュニケーションをより深く理解するために役立つはずだと私は考えているが、その応用範囲は個人の思考や個人間のコミュニケーションにとどまらないはずだ。

例えば多くの人が問いを共有し、それについて共同で答えを出そうとする活動、政策決定のための統計調査とか、感染症の蔓延状況の把握とか、さらに学問としての探究一般も、本稿で提示した問いの基礎理論に基づいた分析が期待できる分野だと思う。

また、多くの人の問いを先取りして成立するマスメディアや、子どもたちの問いをうまく先取りすれば成果が期待できる教育分野などにおいても、問いの基礎理論が貢献できるのではないだろうか。

本稿が実際にそのような貢献ができるようになるためにも、ぜひ建設的な批判を期待したいと思う。

## 注

- (1) 「方法の探求」という立場の詳細については、拙著（佐藤 2022）を見てほしい。
- (2) 入江は問いが<結論>にもなりえることを視野に入れて議論を展開しているが、より重要なのは<前提>の方であり、本稿では<前提>のみを取り上げる。
- (3) 「焦点」という言葉の説明としてよく用いられる「新しい情報」という表現を入江はあえて避けている（p.106）。
- (4) これを私は「質問応答の言語ゲーム」と呼んでいるが、ここでの「言語ゲーム」という言葉はウイト



ゲンシュタインの概念をもとにしつつも筆者独自の意味付けを含んでいるため、混乱を避けるため本文では用いない。筆者の「言語ゲーム」という概念については、拙著（佐藤 2013, 佐藤 2016: 86-95, 佐藤 2019: 第1章）を参照してほしい。

(5) 入江は、推論を理論的推論と実践的推論に分けて考察しているが、本稿で取り上げるのは理論的推論のみであり、以下本稿で「推論」と表記したものはすべて理論的推論を指すこととする。なお、筆者は実践的推論については「問い」から開始されるものではなく「命令」から開始されるものだと考えており、問いとは別の枠組みで考察している（佐藤 2013）。

(6) 入江は「問答推論」（問いを含む推論）が妥当性を満たすための条件として次の4つを（暫定的に）提示している（p.53）。

(Ci) 前提にコミットするならば、常に結論にコミットすること。

(Cii) 完了型の場合には、結論が前提の問いの答えとなっていること。

(Ciii) 暗黙的未完了の場合には、どの前提も、そのままでは、結論となる問いの直接的答えとならないこと（情報与性）。

(Civ) 未完了型の場合には、すべての平叙文前提にコミットし、かつ結論となる問いの直接的答えにコミットするならば、前提の問いの答えとなる少なくとも1つの命題がコミット可能である（柔軟な運用性）。

このうち Ci は結論が正しい（真である）こととほぼ同じ意味であり、改めて妥当性の条件として重視する必要はない。また、「暗黙的」（問いが暗黙であること。これについては本稿第4節の「問いの先取り」を参照）や「未完了型」（結論が問いである推論。本稿ではこれは答えがまだ出ていない不完全な推論だと見なす）は補足的な条件だと考えられるので、核心的な条件は完了型（明示的な問いから始まって結論で終わる推論）についての「結論が前提の問いの答えとなっていること」（Cii）だと見なすことができるだろう。

(7) カモノハシは哺乳類だが卵を産む。

(8) このロジックは、ある程度は直感的に理解できるものだと思うのでこのような記述にしたが、実は第3節の結論を先取りした形になっている。より深い理解のためには、第3節を読んだ後で改めてこの部分を見直してほしい。

(9) 問いに答えるために別の問いが立てられるというイメージは、入江も別の個所で提起している。入江はそれを「二重問答関係」という言葉で表現している（p.147-148）。

(10) ある問いに答えるために別の問いが立てられた時、前者が上位で後者が下位とする。この用語法は入江も用いている（p.148）。暗黙の問いを補った推論表記では、左右（インデント）が上位/下位を表している。

(11) ある問いへの答え（の焦点。焦点については後述）が別の問いの一部（既定条件）になっているとき、前者を上流、後者を下流と表現する。入江もまた「上流/下流」という表現を用いているが、それは前提に対して結論が下流、その逆が上流という考え方であり（p.36-37）、本稿での規定とは異なっている。暗黙の問いを補った推論表記では、（同じインデントの中の）上下が上流/下流を示すと考えれば分かりやすいだろう。入江は、「上流/下流」という表現と「上位/下位」という表現を全く異なる文脈で使用しているが、これらは同時に使用することによって、推論の流れをより正確に表現できると思う。A2の妥当性は「上位」の問い（Q1）と「下流」の問い（Q3）への答えに依存する、というように、両者は組み合わせて理解するべきなのだ。

(12) このことは、（場合によっては）推論においてバックトラック法が必要になることを示している。

(13) この「方向づける」という性質を、私は「志向性」という言葉で表現しているのだが、この用語法は現象学や心の哲学で用いられる「志向性」概念とは異なるので、哲学の議論の参照度合いが大きい本稿では混乱を招くと判断して、本文では用いないことにした。ただ「志向」という日本語の語彙は、「心が一定の目標に向かって働くこと。こころざし向かうこと。また、こころざし」（広辞苑第5版）といった意味合いも持つので、「方向づける」という性質を表現する言葉としてそれほど不適切ではないと

筆者は考えている。詳しい説明は拙著（佐藤 2019: 79-85）を見てほしい。

- (14) ただし、「正しくない」答えを「妥当」だとすることはほとんどあり得ないだろうから、通常は妥当性の中に真理性が含まれているはずだ。実際には複数存在する「正しい」答えの中からより妥当なものを選ぶ、ということになるだろうと思う。例えば、「これは何か」という問いに対して、「1枚の紙」という答えと「報告書」という答えのいずれもが「正しい」としても、状況によっては「報告書」をより妥当な答えとして選ばなくてはならない、ということだ。
- (15) 妥当性という基準が複雑になる理由には様々なものがあるが、これまでの議論から、上位の問い、さらに上位の問い、というように複数の問いから妥当性を判断しなくてはならないために複雑化するということが挙げることができる。
- (16) 「昨日」と「東京」以外でも、「誰が」と問えば「私」（ただし日本語では助詞が変わる）が、「何をしたのか（あるいは、実際に行ったのか、などでも）」と問えば「行きました」が焦点たりえる。さらにこれは自然言語特有の問題ではなく、「 $x=3$ 」といった数式でも同様のことは生じる（佐藤 2019: 110-112）
- (17) 厳密に考えるなら、決定疑問（YES/NO で答える質問）と補足疑問（疑問詞による質問）それぞれについて考察が必要で、実際に入江は分けて論じているが、ここではその論点は省略する。質問の多様性については、次のセクションで詳しく論じたい。
- (18) 「意味」という言葉の使い方について、多少の揺らぎがあるように思うので、この命題が入江の主張を正確に表現しているとは必ずしも言えないかもしれない。
- (19) このような考え方は、第1節で示した、推論は問いを基準とした妥当な答えの選択だという結論と符合する。
- (20) 次のセクションの議論を踏まえれば、これはより正確には「和（の値）」という集合だと考えた方がよい。「高さ」などの量的選択質問についての説明を参照してほしい。
- (21) ただし、入江が紹介する議論はあくまでも問いの意味論であるので、問いを方法として捉えようとする本稿とは議論がかみ合わない。
- (22) 統計学における変数の4尺度のうち、順序尺度、間隔尺度、比例尺度に該当するような差異を持つ集合だということ。
- (23) 質的選択質問、量的選択質問、記述質問という分類は、質問紙調査における質問の分類からもヒントを得ている。
- (24) 例えば以下のような推論が考えられる。
- Q1 彼の死因は何か
- Q2 彼はどのようにして死んだのか
- A2 彼は自分の部屋に遺書を残し、窓から飛び降りて死亡した
- A2 彼の死因は自殺だ
- Q2 は記述質問だが、その答えである A2 は上位の問いである Q1 によって妥当性が判断される。つまり A2 の記述は死因を適切に判断できるように（選択できるように）方向づけられている。このことから、Q2 は質的選択質問に準じるものだと考えることができる。
- (25) 他にも様々な呼び方があるようだが、本稿では入江に倣ってこう呼ぶことにする。決定疑問に対して、疑問詞を用いる疑問文を「補足疑問」と呼ぶ。
- (26) 筆者は社会調査法という授業で質問文作成の実習を行っているが、その際、質問文を作るときは「はい／いいえ」という選択肢にははいけいと教えている。その理由の1つはこのような選択肢では具体的な意味を確定できない場合があるからだが、それはここで説明したことと通じている。このことはインタビュー調査でも同じであって、「はい／いいえ」と答えさせてしまったり、そのような答えだけで満足してしまったりするのは危険だろう。
- (27) 「あれは何」という問いに対して「消防車」という答えを得た子どもは、そのことによって初めて、「消防車って何」と問うことができるようになるのだ。

- (28) 入江も「何」の問いが曖昧であり、具体的なものさし（もちろんそのような言葉は使っていないが）を設定する必要があると述べている（p.117-118）。
- (29) こう考えると、「なぜ」という問いが実際にはかなり曖昧な問い（少なくとも「理由」や「原因」などを問うことに比べれば）であることが分かる。
- (30) 入江は「なぜ」の問いを、推論を答えとする問いであると説明している（p.120-121）が、原因や理由は推論ではない。「なぜコーヒーを飲むのか」と問われて「眠くならないため」と答えるのは「理由」であり、推論とは言えないからだ。もし「なぜコーヒーを飲むと眠くならないと思うのか」と問われれば（根拠）、この場合は答えが推論だと言えらるだろうが、先の問いとは明らかに問われていることが異なる。これはいわばメタ質問（なぜコーヒーを飲むのか）とその答えについてのメタ質問なのだ。
- (31) 筆者の用語法では、これは「言語ゲームに言及する言語ゲーム」ということになる（佐藤 2019: 117）。
- (32) このように記述質問を選択質問に帰着させることができるのは、質問紙調査の自由回答項目がコーディングされることによって初めて統計的な分析に利用できるようになることと同等だと考えれば、わかりやすいかもしれない。
- (33) これは第4節で説明する問いの先取りにあたる。
- (34) これらが「問いの語彙」であることは、拙著（佐藤 2022）で詳しく論じている。
- (35) この場合は「味」が問いの語彙であり、「甘い」は「答えの語彙」と呼ぶべきだろう。
- (36) このことから、問いの語彙は問いの「ルール」であると筆者は考える（佐藤 2022）。
- (37) ただし、後述する通り、筆者は命令文についてのこのような考え方には同意しない。
- (38) 実はサールは「試験」についても触れており、試験の場合は「（聞き手が）その回答を知っているか否かということを知ることを欲している」と述べている（Searle, 1969=1986: 125）。これは受験者があらかじめ答えを知っていなければならないかのような言い方であり、どこまでも「考える」という要素を排除しているのだ。
- (39) 「あなたが東京に行った日付」という情報なのか「あなたが昨日行った場所」についての情報なのかは、焦点位置が分からないと区別できない。
- (40) 「願う」なら「願うか（願っているか）」、「宣言する」なら「宣言するか」、「感謝する」なら「感謝するか（しているか）」とそれぞれ問うことができる。
- (41) 「行く」なら「行くか」と問えるが、「行け」を疑問形にすることはできない。
- (42) 厳密に言えば、問われているのは本来「私が本当に～するかどうか」だ。つまり「約束する」というのは、もともとは「私は本当に～します」という意味であり、それを強い表現にしたり制度的な保証を加えたりして「約束する」になるのだ。
- また、別の説明の仕方をする、「私は約束をする」という発話がどのような場合に意味を持つのかを考えてみればよい。この発話が意味を持つのは、「私は約束をする」という「情報」が相手にとって意味がある場合、すなわち「約束をするかどうか」という選択（の結果）が相手にとって価値のある情報である場合に限られる。つまり、私が約束をするかどうかを相手を知りたがっている場合のみ、この発話は意味を持つのだ。これが、問いが潜在的に存在するという意味だ。
- (43) 「明日東京に行きなさい」という命令文が、「私はいつ東京に行けばよいですか」という問いへの答えであるという事例が、命令文を例外とする見解への反論になりえるかどうかを検討してみよう。この場合、「明日」は確かに<答え>であるのだが、「行きなさい」は問いの条件であり、初めから共有されている必要がある（だから問いが「行けばよいですか」になる）。ということは、まず「東京に行きなさい」という命令があり、それを受け入れた後で「いつ行けばよいですか」と問われ、「明日行きなさい」と答えたという流れであるので、命令自体が何らかの質問への答えであるということはない。
- 次の節の議論の先取りになるが、「明日東京に行きなさい」という命令は、「東京に行きなさい」という命令と同時に「いつ行けばよいのか」という問いを先取りして「明日東京に行きなさい」という発話になったという解釈もできる。

- (44) 筆者の用語法ではこれが「質問応答の言語ゲーム」であり、命令については「命令行為の言語ゲーム」の一部をなしていると考え（佐藤 2019）。
- (45) まず、発語内的力のように発話に何らかの「力」があるとすれば、それは「質問」と「命令」の2つだと筆者は考える（逆に言えば返答には「力」はない）。その上で、あまりにも多様すぎる質問・応答のセットを分類するなら、それは問いの類型化になるだろうということだ。このように考えると、言語行為論が丸ごと筆者の考える「言語ゲーム」に置き換え可能なのだと主張する方が分かりやすいのかもしれない。なお、問いの持つ「力」については、入江の「問答の不可避性」についての議論（p.203-205）が参考になるだろう。
- 発語内的力について「約束」を例にして少し補足すると、「約束」がどうして効力を持つのかという疑問は当然だと思うが、その答えは、言語の使用にではなく、約束という行為の具体的な方法に求められるべきだと筆者は考える（佐藤 2022）。
- (46) もちろん、それが道徳的に正しいことだと主張しているわけではない。
- (47) この部分は、入江の「前提承認要求」（p.182）を意識して書いた。当初は入江の議論とうまく接続するように展開しようと試みたのだが、今のところそれは成功しておらず、結果として全く異なる方向性を持った議論になった（そのため本文中で「前提承認要求」という言葉を用いていない）。
- (48) この部分はポメラantzによる「他者から情報を得る間接的な方法」（Pomerantz 1980）を参考にしている。ただし、例文は独自のものだし、議論の中身もポメラantzのものとは全く異なる。
- (49) つまり「焦点位置」は問いの語彙なのだ。

## 文献

- 入江幸男, 2014, 「問いと推論」『待兼山論叢』48: 1-16
- 入江幸男, 2020, 『問答の言語哲学』勁草書房
- Pomerantz, A., 1980, “Telling My Side: ‘Limited Access’ as a ‘Fishing’ Device” *Sociological Inquiry*, 50: 186-198
- Searle, John Rogers, 1969, *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge: Cambridge UP. (坂本百大・土屋俊訳, 1986, 『言語行為——言語哲学への試論』勁草書房.)
- Searle, John Rogers, 1979, *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge: Cambridge UP. (山本友幸監訳, 2006, 『表現と意味——言語行為論研究』誠信書房.)
- 佐藤裕, 2013, 「言語ゲームと志向性——社会学的観点から」『富山大学人文学部紀要』59: 1-33
- 佐藤裕, 2016, 『ルールリテラシー——共働のための技術』新曜社
- 佐藤裕, 2019, 『人工知能の社会学——AIの時代における人間らしさを考える』ハーベスト社
- 佐藤裕, 2023, 『ルールの科学——方法を評価するための社会学』青弓社（刊行予定）
- Wiśniewski, Andrzej, 2013, *Questions, Inferences, and scenarios*, Milton Keynes, UK: College Publication

